

18世紀イタリアにおける
イギリス経済文献導入の一側面
——ヒュームを中心に——

堀 田 誠 三

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

I

イタリア経済思想史の流れは、18世紀の半ばに、利子および貨幣の功罪にかんする論議から経済学の成立にむけて転換をみせるといえよう。つまりローマ・カトリック教会による徴利禁止と徴利是認論との対立のような、経済現象を宗教的倫理的規範に直結させる議論や、貨幣制度の混乱への技術的対策にかんする議論から相対的に独立して、経済学が自立的な領域を形成しはじめる。その指標となるのは、ガリアーニ（Ferdinando Galiani, 1728-1787）の『貨幣について』¹とロック（John Locke, 1632-1704）の『利子・貨幣論』のイタリア語訳²であり、ともに1751年にナポリとフィレンツェで刊行された。

『貨幣について』は、国家債務償還をめざすインフレーション政策容認論という実践的性格をつよくもっている。この本でガリアーニは、ロー（John Law, 1671-1729）のシステムの失敗にみられるような過剰信用への道をとざしインフレーション政策の有用性を論じるために、紙幣を批判し交換価値の尺度である貨幣（＝貴金属）価値の安定的尺度を探求した³。かれは体系的な理論の構築に成功しなかったとはいえ、従来の貨幣政策について、恣意的な論議にもとづく法令が貨幣制度の混乱の原因であったと指摘したうえで、こうした法的規制そのものが経済現象については無用であるという。「貨幣におけるそうした比率〔金銀比価〕を法律によって定めるのは、利子率や為替相場（il prezzo degli interessi, e de' cambi）のばあいと同じく、無益であることを立証するために、ジョン・ロックはかれの論考で次のように論じる。すなわち、事物の本性が比率を定めるときは、法律を介入させる必要はない。なぜならその法律が本性から逸脱していないばあい、それは無用であり、もしくは逸脱しているとすれば、それは不正であり、すべて不正なものは誰にとってもつねに有害であるから、と」⁴。利子率法定にたいするロックの反対論を引き合いにだして、ガリアーニは、経済現象における客観的法則の存在を主張したのである。

利子論は、『貨幣について』第5編「貨幣の所産（frutto）について」の序論にいうように、なお「重大、困難、かつ危険な主題」であったから、ガリアーニは慎重に、自分の見解が、「徴利（usura）」にかんする、「われわれの神聖な宗教」の戒律と教皇ベネディクトゥス14世（Benedictus XIV; 在位 1740-1758）の大勅書（1745年）の趣旨に反するものでない、とのべている。ガリアーニによれば、大勅書は、消費貸借における「徴利、すなわち等価をこえる利得」の禁止を再確認しており、このことは「まったくもって正しい」。しかし利子論史の回顧と貨幣貸付の盛行という実態をふまえ、ガリアーニは、等価の返還を金属の重量によるものと規定すれば、貨幣貸付が実質的に不可能となるとのべ、さらに等価の判定基準は簡単に決定できないのであって、貸手が「損害補償（assicurazione）の価格」を要求するばあい、その契約は罪深いものとなるのか、と問いかける⁵。

この時ガリアーニの意図は、むしろ徴利の是非論への関与を拒否することにより、続けて「今やわたくしは、利子 (interesse) について、統治の術にかかわる部分を論じるところに来た」とのべる。国権主義 (giurisdizionalismo)⁶ の立場から宗教の世界 (教会) と政治の世界 (世俗国家) を区別するガリアーニにとって、政治的観点からすれば、徴利の是非にかかわらず、利子は「できるかぎり低く穏当である」ことがのぞましい。高利をさげ利子率を低下させるためには「貨幣の独占をさげ、その返還を保証すること」で足り、「貨幣の利子 (frutto) を法律で定めることはできない」。ここでガリアーニは利子率決定のメカニズムについて、ふたたびロックの参照をもとめ、次のように『利子・貨幣論』のイタリア語訳の紹介もする。「ところで、そうした主題については、ジョン・ロックが、かれの一論説において長々と論じているので、それにゆずることにする。その論説は、いまのところ英語原文のままの状態だが、遅かれ早かれわれわれの俗語に翻訳されるであろうことは、疑いない」⁷。

さらに『貨幣について』第2版で追加された注で、ガリアーニは1744年に、英語の勉強をしようと、『利子・貨幣論』の翻訳をこころみたと書き、上の引用で予告したイタリア語訳について、次のように紹介と批評をおこなっている。「本書が出版された1750年には、他の言語に翻訳公刊されていなかったが、その後まもなく、学識ある人物でわたくしの友人であるジョヴァンニ・フランチェスコ・パニーニ [Giovanni Francesco Pagnini, 1713または1715-1789] 氏とアンジェロ・タヴァンティ [Angelo Tavanti, 1714-1782] 氏による翻訳が、1751年にフィレンツェにおいて、アンドウレア・ボンドゥッチ書店から4つ折り判2巻本となって、イタリア語で印刷された。フィレンツェの訳者たちは、注、考察、注釈、解明をつけくわえている。さらにテキスト全体を分解移動して章と節に区分し、諸主題についていくらか整理している」⁸。

ガリアーニは言及していないが、この「4つ折り判2巻本」の第2巻には、訳者のひとり、パニーニによる『物財の正当価格、貨幣の正当な評価、およびローマ人の商業にかんする試論』が、ページ付けを別にして収録されている⁹。パニーニは外国貿易を想定したうえで、商人は、イタリア、イギリス、オランダと国はちがっても、「一種の社会」を形成し、「物財の価格 (pregio)、すなわち評価 (valuta) の決定に適用される法」に服している、とのべる。価格の決定要因として4箇条がしめされ、第1に「物理的量 (quantità fisica)」とよばれる商品の供給量があげられる。以下、「道徳的量」という規定のもとに、第2に交換当事者の欲望、すなわち「需要 (bisogno)」、第3に商品の効用、第4に「売れ行き」すなわち購買者数、があげられる¹⁰。この経済世界は「商人社会 (circolo della società commerciante, società commerciante)」もしくは「商業社会 (circolo del commercio, società di commercio)」とよばれ¹¹、そこにおいて交換手段および価値尺度として使用される「貨幣は、他の物財と同様、価格の共通の諸規則にしたがう」のであるから、貨幣価値を法律によって定めることはできない¹²。

こうしてパニーニにあっては、客観的な経済法則に支配される、固有の経済世界が存在するという認識がゆるぎなく成立し、その認識は、以下にみるように、ローマ社会と近代社会の歴史的対比によってささえられる。すなわち、ローマの統治原理は軍事と征服だから、ローマの商業は基本的に征服によってえた富の奢侈の支出に依存するという性格をもち、個人の富裕化は国家の貧困化をまねく¹³。この私益と公益が対立した理由についてパニーニは、ローマ社会における巨大な私有財産の集積が公有物（征服戦争の獲得物）の私物化に基礎をおいていたという事情ではなく、製造品の輸出を中心とする外国商業の欠如、さら平穩のうちに始めて成長しうる製造業は軍事体制そのものと相いれないこと、を指摘する¹⁴。商業の時代が到来しているという視点から、かれはローマ社会における生産力的基礎の欠如をみぬいて、次のようにいう。「戦争で他の諸国民から獲得した金銀によって維持されていたローマは、有利な商業の欠如と過度の奢侈による暮らしのゆえに、かつての偉大さをうしない、ついにはその敵の下僕となった。いわばローマは、他の諸国民から奪ってためこんだ富を、かれらに返したのである」¹⁵。

このようなローマの社会制度は、イギリス、オランダ、フランスが商業上の覇権をめざして競いあう時代に、もはやふさわしくない。「長々と検討してきたのは、戦争と征服による拡大のみをめざすローマの統治は、個人も社会全体も富裕とするのに役立つような種類の商業をうみだすことができなかったこと、そして貨幣にかんするローマ法学の格率とロック氏のそれとの相違の原因は、そうしたローマの制度に帰因すること、である」。いいかえれば、「現在ではどんな政府も、その維持や収入を戦争と征服からひきだそうと考えはしないのだから、貨幣は、ローマ法学の格率ではなく、まさにロック氏の格率にしたがって規制される必要があること」が明白であると主張して¹⁶、パニーニは法学から経済学への転換¹⁷の必要性を訴えている。

パニーニの議論は、経済理論の洗練と鋭さという点では、ガリアーニにはるかに劣る。しかし古代と近代を比較する歴史的展望に観点をうつせば、かれのほうが、ガリアーニとくらべて、イタリアにおける啓蒙の経済学の成立にちかい地点にいる、といえるであろう。ガリアーニによれば、近代社会の商業的富は、古代社会の征服による富よりのぞましいけれども、商業の繁栄が奢侈から衰退への道をたどることは、歴史の必然である¹⁸。これにたいしてパニーニにあっては、商取引一般を論じるのではなく、製造業という生産力的基礎にたつ外国商業に着目することで、近代社会の将来にたいする悲観論から脱出することが可能となった。

かれによれば、郵便、羅針盤、印刷術の発明は、旅行、航海、商業を盛んとし、ヨーロッパの諸国民を一体化するとともに文明化する。書物、雑誌、手紙でむすばれる「文芸共和国（Repubblica letteraria）が、他の諸国民の発見をすべての国民に共有のものとし、見破られない神秘や秘密はないから」、軍事技術についても、ある国民の優位は長続きしない。また軍事への依存が国家の繁栄を保証しないことは、アメリカを征服したスペインとポルトガル

の衰退によって立証済みであり、「現在ヨーロッパの諸国民を統治している体制の相違、そして諸国民相互の関係の多様性にもかかわらず、軍事体制（sistema militare）は大いに困難というよりも実行不可能となり、今日のヨーロッパ諸国は商業社会（società di commercio）に集って競いあい、そこから自らの偉大と生存をひきださなければならない、といえるだろう」¹⁹。

このように、人類は商業の時代にあるという歴史認識と、商業によって結合したヨーロッパにおける、文芸共和国という知的共同体への強烈的な参画の意識のもとで経済学の形成がはじめられた。『貨幣について』の「序文」で、ガリアーニは貨幣論の先達としてロックとともにムロン（Jean-François Melon, 1675-1738）をあげ²⁰、『利子・貨幣論』イタリア語訳で訳者たちは、訳注においてさまざまな著作家から引用したが、なかでも『商業にかんする政治的省察』の著者にこたえて、1738年にハーグで印刷された²¹、『財政にかんする政治的省察』から多くをとったと書き²²、ムロンにたいしてデュト（Charles Dutot, ?-?）を前面にだしている²³。これらの例からわかるように、18世紀イタリアにおける経済学形成史は、イギリスおよびフランスを中心とする外国経済文献の導入史と不可分であり、その意味でイタリア人の著者による経済学書と外国経済書の翻訳が同じ年に公開されたのは偶然でなかった、といってよい。

この事態を念頭において、ミラノの啓蒙思想家ヴェッリ（Pietro Verri, 1728-1797）は、1763年の稿本『ミラノ公国の商業にかんする考察』の序文で、「政治経済学（scienza dell'economia politica）」すなわち「国家の力量と生命力、租税の配分と性質、諸国民のインドゥストゥリアと商業の性質をはかる学問」が、18世紀ヨーロッパに台頭しつつある、とのべた。かれは、上にみたパニーニの文芸共和国への言及と同じく、交通通信手段の発達による文化的統合の進展のなかで経済学の成立をとらえ、次のようにいう。「今日では、航海術、印刷術、郵便が全ヨーロッパで完備している。そのおかげで諸外国の事物、習俗、法が大量に紹介され、われわれはさまざまな社会の利害関心の性質について考察せざるをえない。そしてヨーロッパの才幹ある人は皆、そうした古代人には知られていなかった手段で交流することによって、多くの鏡が同一の点をてらしだすかのように、真理を鼓舞し啓示するために協働している。新発見はローマからロンドンへ、ベテルブルグからマドリッドへとんでいき、現代の数ヶ月の密度は、過去の何年もの期間に匹敵する」²⁴。

啓蒙思想家にふさわしく、人類の歴史的進歩への確信とコスモポリタンな観点をしめすヴェッリにとって、ヨーロッパの諸国民のなかで、イギリス、「あの啓蒙された国民」が経済発展の競争の先頭にたっているのがであった²⁵。すでにみたロックをはじめ、いわゆるイギリス重商主義の諸文献（ボーリングブルック＜Henry Saint-John, viscount Bolingbroke, 1678-1751＞、ダヴナント＜Charles Davenant, 1656-1714＞、ジー＜Josua Gee, ?-?＞、チャイルド＜Josiah Child, 1630-1699＞、ヒューム〈前出—注23〉、『ブリティッシュ・マーチャント』＜The

British Merchant, 1713-1714>、『マーケイター』<Mercator, 1713-1714>など）への言及は、ヴェッリにかぎらず、この頃のイタリア経済文献におびただしくみられる。この過程の全面的な解明は、対象領域の広大さにくわえて、イギリスの文献は、おもにフランス語訳を経由してイタリアへ流入していたという事情も考慮にいれなければならない、容易でない。その予備的作業として、次に、ヒュームの『政治論集』のイタリアへの導入の様子を、そのイタリア語部分訳を中心に跡づけてみたい。

II

以下、最初に導入の過程を年表風に紹介し、ナポリの啓蒙思想家ジェノヴェージ（前出・注23）のヒューム評価を簡単にみたのち、第3節および第4節で『政治論集』のイタリア語部分訳について検討しよう。

これまでの研究によれば、『政治論集』への反応は、まず1754年にヴェネツィア刊の『文学史覚書』誌²⁵にあらわれた、とされる。すなわち、ヒューム－ウォーレス論争にかんして、ウォーレス（Robert Wallace, 1697-1771）を支持するナポリからの手紙と、ミラノからのヒューム支持の手紙が掲載された。同誌は翌年、商業と人口にかんするヒュームの議論は「悪循環」におちいつていると論評する²⁶。

同じ1755年にフィレンツェ刊の『新文献』誌²⁷では、ル・ブラン（Jean-Bernard Le Blanc, 1707-1781）によるフランス語訳²⁸の書評が8回にわたって分載され、続いて1756年に同誌はモヴィヨン（Eléazar Mauvillon, 1712-1779）訳²⁹をも紹介した³⁰。ル・ブラン訳には、イタリア市場を意識したものか、長文の「フィレンツェの教授、ラーミ〔Giovanni Lami, 1697-1770〕博士殿によせる訳者序文」がそえられ、そのなかでラーミは『新文献』誌を編集する「文芸共和国」の住人であること、また近年「フィレンツェで農学会が設立された」（傍点は原文イタリッケー以下同様）ことに言及している³¹。そしてイタリアでは、ル・ブラン訳がモヴィヨン訳を圧倒したようであるといわれる³²。

1758年にはマン（Thomas Mun, 1571-1641）『外国貿易によるイングランドの財宝』（1664年）のイタリア語訳において、訳者のジェノヴェージは貨幣蓄蔵にかんしてヒュームの参照をもとめた。1761年には、ローマ教会によってヒュームの全著作が禁書とされた³³が、ジェノヴェージは1764年にトゥリンチ（Cosimo Trinci, ?-?）の『経験深い農業者』（1726年）³⁴の復刊への「序文」で、ヒュームの「古代人口論」をとりあげている。さら1766年～67年刊のジェノヴェージ『商業講義』³⁵の1章がヒュームの公信用論の論評にあてられている。

1767年には、『政治論集』の部分訳が、英語・イタリア語対訳本という形式で、ヴェネツィアで出版され³⁶、同年に刊行されたフランス語部分訳³⁷からの抜粋と論評が、1768年にスイスのクールで発行された『文献雑誌』³⁸に掲載された³⁹。上の対訳本からイタリア語訳をとり

だして、1774年に第2版がヴェネツィアとパレルモで、第3版がすでにフランス革命の波にあらわれている1798年に、レッジョとパルマで刊行されたのである。

上にみたマンのイタリア語版は、ヴェッリが『コーヒー店』誌⁴⁰において「ジェノヴェージ氏の卓越した著作」⁴¹とよんだ、ケアリー（John Cary, ?-1720?）『大ブリテン商業史』のイタリア語訳（1757-58年）⁴²の第2巻に『商業宝典』という題名で収録されている。ところがこの版本は、とうてい忠実な翻訳とはいえず⁴³、第15章は原著（第16-18章に該当）を無視してジェノヴェージが執筆した財政論であり、そこには主権者の貨幣蓄蔵について、「ヒューム氏の『政治論集』を参照されたい。この著書は、われわれの著者〔マン〕と同じ意見にしたがっており、当該の問題について、非常な慎重さと学識をもって論じている」という注記⁴⁴がある。これは、論説「公信用について」をさすものであり、『商業講義』第2部第7章は「国内の公信用についての上述の2章にかかわる、ヒューム氏の諸考察」をとりあつかう。ここでジェノヴェージはヒュームにたいして、第1に、貨幣蓄蔵の肯定はヒューム自らの貨幣理論と矛盾している、第2に、イギリスの事情を過度に一般化しているとの批評をあたえ、さらに「流通」にかんするヒュームの議論を紹介しつつ、証券類の流通ではなく、生産力に裏付けられた商品流通を「真の流通（circolazione reale）」とする自身の見解をもしめした⁴⁵。

ジェノヴェージの関心は、ヒュームにたいする第2の批評にみられるように、何よりもナポリ社会の改革にあった⁴⁶。先にふれた「古代人口論」への論評も、「われわれの〔ナポリ〕王国は、現在より多数の住民を扶養し維持できるか」という観点からなされ、モンテスキュー（前出－注23）の古代人口優越論の紹介に続いて、こういわれる。「何年かまえにフランスで『人口について』という小冊子が刊行されたが⁴⁷、そこでの推計では、われわれの王国をなしている、イタリアのこの部分だけで約700万人の住民を養っていたとされている。有名なイギリスの哲学者、デイヴィッド・ヒューム氏は『古代人の人口について』の、まったく博識で学術的な小著において、この推計と計算に疑いをはさむべき十分な理由があるとし、『人口について』の著者が想定するように、イタリアが約1800万人の住民をもちえたとは、とうてい信じがたいという考えのようである。わたくしも、この推計は誇張にすぎると思うけれども、われわれが事実かなりの人口減少をみたという確信をゆるがすものではない」⁴⁸。

上にみた1754年のナポリからの手紙と反対に、ジェノヴェージは人口の推測についてヒュームに賛意をあらわすが、「真の哲学者の考慮に値する」問題は、人口減少の原因究明であった。それには気候風土のような「物理的原因（cagioni fisiche）」もあるが、「われわれの王国の人口がすくない、つまり、いうならば元来可能なだけの人口をもたないにしても、それはけっして自然的（naturali）原因によるのではなく、社会的（morali）原因による」⁴⁹。続けてジェノヴェージは、社会的原因の主要なものが「農業の未発達と弱体」であると主張して農業改良の必要をとき、この要請から封建的大土地所有への批判をみちびきだす。この議論とモンテスキューの風土論の関連は別に検討しなければならないが、ジェノヴェージの

論調が歴史的展望において、ヒューム寄りであることは否定しがたいように思われる⁵⁰。

この時点でかれのヒューム研究は深まりをみせていた。すなわち、『大ブリテン商業史』の段階では、『政治論集』のテキストとしてモヴィヨン訳が利用されていた⁵¹のに、上の引用には「Essay of the populousnes of ancient nations は、かれの他の諸著作とともに、1758年にロンドンで、4つ折り判にて、Essays and treatises on several subjects という題名のもとに、再発行された」という英文をまじえた注⁵²があり、ジェノヴェージが英語の原典を読んでいる様子うかがえる。この版本は『商業講義』でも使われており、第1部第10章「奢侈の技芸について」のなかで、奢侈を快樂の洗練とする定義について「この定義はデイヴィッド・ヒュームが、1758年の4つ折り判論集のなかの奢侈にかんする論考の157ページで、あたえたものであるように思われる。かれがいうには、奢侈というのは、大変あいまいで疑わしい意味をもつ言葉である。…だが一般には great refinement in the gratification of the senses、すなわち感覚の快樂につかえる高度の洗練という以外の意味はない、のである」と注釈⁵³をくわえている。イタリアにおいて、古典語は別として、外国語の主流はフランス語であるという事態は動かしがたいけれど、ヒュームの対訳本という企画が出現する素地は準備されつつあり、「わたくしのみるところ、今日では英語は流行の言葉となっている」⁵⁴というのが、訳者の認識であった。

III

『政治論集』のイタリア語部分訳の初版は、「商業にかんする政治的試論集」という題名をつけ、すでにのべたように、偶数ページに英文テキスト、奇数ページにイタリア語訳という対訳2巻本で1767年に出版された。第1巻のタイトル・ページは次のようである（一橋大学社会科学古典資料センター所蔵、ゴールドスミスクレス文庫マイクロフィルム）。

英文

Political Essays on Commerce by David Hume Esq; With the Italian Version by Matthew Dandolo Noble Venetian. Vol. I. Venice, printed for Lewis Pavini, and John Bassaglia. MDCCLXVII. With Authority.

イタリア文

Saggi politici sopra il commercio del Signor David Hume. Traduzione dall'Inglese di Matteo Dandolo Patrizio veneto. Tomo primo. Venezia, Appresso Giammaria Bassaglia, e Luigi Pavini. MDCCLXVII. Con licenza de'superiori, e privilegio.

第2巻は、巻数の表示がそれぞれ、Vol. II、Tomo secondo とされているだけで、あとは第1巻と同じである。

第1巻には「聖マルコ長官故ジョヴァンニの子、アルヴィーセ・エーモ [Alvise Emo,

1717-1790] ⁵⁵閣下に」ささげられた、訳者ダンドロ (Matteo Dandolo, 1741-1812) ⁵⁶の序文 (pp. v-xvi) に続いて、「商業について」 (pp. 2-58/pp. 3-59.—英文とイタリア文のページ数をこのように並記する)、「技芸の洗練について」 (pp. 60-106/pp. 61-107.) (イタリア語のほうは「奢侈について、もしくは技芸の洗練について」となっている)、「貨幣について」 (pp. 108-160/pp. 109-161.)、「利子について」 (pp. 162-210/pp. 163-211.) および「目次」 (p. 212/p. 213.)、第2巻には「目次 (ページ付けなし [p. 2/p. 3.])」「貿易差額について」 (pp. 2-72/pp. 3-73.)、「貿易上の嫉妬について」 (pp. 74-88/pp. 75-89.)、「租税について」 (pp. 90-110/pp. 91-111.)、「公信用について」 (pp. 112-164/pp. 113-165.)、が収録されている。

第2版 (1774年) のタイトル・ページは次のようである (ルイジ・エイナウディ研究所蔵本)。

Saggi politici sul commercio del Signor David Hume tradotti dall'Inglese coll'aggiunta di un Discorso preliminare sul commercio di Sicilia di D. Isidoro Bianchi socio della Reale accademia delle scienze di Siena. Seconda edizione. Venezia, e Palermo MDCCLXXIV. Presso Andrea Rapetti q. Antonio Negoziante Veneto. Nella Stamperia di Vincenzo Gagliani Con licenza de'superiori.

初版にみられたダンドロの序文にかわってビアンキ (Isidoro Bianchi, 1731-1808) ⁵⁷の「シチリア商業にかんする序論」 (pp. iii-xii.) がおさめられ、以下にダンドロ訳の本文 (pp. 1-128.) と「目次」 (p. 128.) が続く。

第3版 (1798年) には、既存の書誌情報にやや混乱がみられる ⁵⁸が、わたくしの知るかぎりわが国でも、大阪商業大学と大阪大学にそれぞれ1部所蔵されているので、それらを比較してみたい。

まず、大阪商業大学蔵本のタイトル・ページは次のようである。

Saggi politici sopra il commercio del Signor David Hume Traduzione dall'Inglese di Matteo Dandolo veneto Nuova edizione Parma per I Fratelli Gozzi con approvazione 1798

もうひとつの大阪大学附属図書館ヒューム・コレクション蔵本のタイトル・ページは、こうである。

Saggi politici sopra il commercio del Signor David Hume Traduzione dall'Inglese di Matteo Dandolo veneto Nuova edizione presso Annia Coen in Reggio

つまり大阪商業大学本との相違点は、第1に出版地と出版者の表示、第2に出版年がしめされていないこと、である。

大阪商業大学本、大阪大学本とも、「出版者」の序文に続き初版序文が「マッテオ・ダンドロの論考」、第2版の序論が「イジドロ・ビアンキ博士の論考」と題し、それぞれ献辞や謝辞にあたる部分をのぞいて、収録され (ページ付けなし [pp. 3-31])、本文 (pp. 1-146)、

目次 ([p. 147]) という構成で、ページ数、組版に相違はみられないが、146ページのみ例外で、大阪大学本には本文が終了してから、余白に大阪商業大学本のタイトル・ページのものと同じの出版地以下の表示 *Parma per I Fratelli Gozzi con approvazione 1798* がそのまま移動され刷ってある。

以上の比較から、大阪商業大学本と大阪大学本は基本的に同じ版本で刷りがことなるものと考えられる。くわしい出版事情については今のところ不明だが、大阪大学本に名前がでくるコーエン (*Annonia o Graziadio Coen*, 1757-1854) がレッジョ生まれのユダヤ人である⁵⁹ ことと、何らかの関係があるように思われる。

このように第3版の研究が未開拓であるのに比べ、初版については、ある程度の研究と紹介がなされている⁶⁰。訳者のダンドロは、おそらく1767年に、ヒュームに宛て、次のような手紙を、フランス語で書いた。「あなたの商業にかんする政治論集を、学者たちはみな、さかんに読んでおります。そこでわたくしは、それを公衆のために役立てようと、イタリア語に翻訳する気になりました。実に抜きんでた価値をもつご著作の著者であられるあなたに、1部をお送りする榮譽をえましたので、ご受納いただければ幸いです。あなたのお考えを正しく表現するように気を配りはいたしました。が、原語の見事さにはおよばなかったことを、お許しいただきたく存じます。わたくしは、あなたの人口にかんするご論説を近いうちに出版したいとも願っておりますが、それをあなたに贈呈することは、わたくしの喜びとなるでしょう」⁶¹。前節でジェノヴェージについてみたように、ヒュームの「古代諸国民の人口について」がイタリア語にうつされる必然性は十分にあったのだが、ダンドロの予告は実現されなかったようである。

この間の事情は今のところ不明であり、ダンドロの序文でも、古代人口論についての言及はみあたらず、上の手紙に対応してはヒュームの文体が「思慮深く、洗練され、純化された」ものであり、「デイヴィッド・ヒューム氏は、文芸共和国においてあまりに著名であって、わたくしの筆によってあらたに名声を獲得するまでもない」というのみである⁶²。

ダンドロは、自身が編集翻訳した『商業にかんする政治的試論集』について、「この本におさめられている内容は、大変有用で興味深く、まったく正当にも一国の福祉の源泉にあたるといえる」とのべる。この時かれは、国富一般を論じているのではなく、続けて次のようにいう。「この真理をわれわれよりよく理解できるものは、誰もいない。わたくしはいう、われわれとは、かつてヨーロッパの一大商都であった国 (*patria*) の市民であると、そして、そこではわれわれの製造品が取り引きされていたと。古くはわれわれは勇気をもって商業を推進し、以前には世界中から栄光と富を獲得するすべを心得ていたものであった」⁶³。

かれによれば、喜望峰の発見にはじまる東西インド航路の開拓によって、ヴェネツィアは東インド貿易をうしない、世界貿易の構造変化にともない他の諸国民に製造業がおこった。「この事態が進展するにともなうて、われわれは衰退をみた。だがわれわれの商人たちが均

衡 (bilancia) をたもつのに意をもちいておれば、この衰退もそれほど重大なものでなかったであろう」。ヴェネツィアは各種の物産にもそれに加工する人手にも事欠かないのに、ヴェネツィア人はその努力をおこたった。ダンドロはいう。「わたくしにはその理由はまったく明白に思われる。3世紀前には、商人であることは富者や大身の名誉であったのに、現在ではそうでない。われわれの市民は新大陸からの獲得品に心うばわれ、新発見の結果である海上商業の衰退にずいぶんうんざりして土地 (terra) にすがりつき、かれらの財産を水上で運にまかせるより、収入はずっとすくなくとも、むしろ安全な土地所有者 (proprietari de'fondi) として生きることをこのんだのである」⁶⁴。

この土地への回帰が流行となり、上流市民の行動様式を下層市民が模倣した結果、成功した商人は上昇転化して貴族となる。その帰結として18世紀後半のヴェネツィアが存在するのであり「現在、土地所有者としての資格において暮らしているのは、われわれ自身である。そういう者として、われわれは商取引の増大に最大の関心をはらうべきである」。こうのべてダンドロは、地主と、「商人 (mercanti) すなわち、職人 (artefici) と海事関係者 (marinai)」は、利害をとともにすると説く。つまり外国商業の衰退にともなって、その関係者が国外に移住すると人口が減少し、消費需要が減退し食糧価格が低下する結果、地主の収入も減少するという⁶⁵。この立論は、ヴェネツィアにふさわしく、国内市場の主役が外国貿易の関係者だから、外国貿易が衰退すると国内市場そのものが消滅するというダンドロの認識をしめす。かれは、「外国商業が公共の富と力の真の指標である」⁶⁶とのべて、貿易差額論の立場をくずしていない。しかし立論の基礎には、ヒュームの農工分業による国内市場形成論があり、ダンドロはそれを裏返しに使っている、といえるだろう。つまり、国内市場の重要性にかんする理論的認識から、ヴェネツィアにおける国内市場の不在という現実認識がみちびかれ、そういうところで外国商業がなくなれば、商業化の道はゆきづまるほかない。したがって、ダンドロによれば、国内の人口の維持はがえって地主の負担となるのである⁶⁷。

これと反対に外国商業が繁栄すれば、貨幣が豊富となり、食糧価格の上昇につれて土地価格もあがるから、地主の利害は商人のそれと密接にむすびついている。その地主にダンドロは、「最後に、われわれは、土地をもっていない人びとよりはるかに強い絆で祖国に結びつけられていることを考えてみよう」とよびかける。「商人、職人、船員 (marinaio)」は他国へ移住するが、地主にはそれができない。だからこそ地主は私的利益にとらわれず、商業への配慮を「第1級の市民」にふさわしい任務とみなすべきである⁶⁸。

ダンドロのヴェネツィア商業論にかわって、第2版に「シチリア商業にかんする序章」を書いたビアンキは北イタリアのクレモナ生まれのカルマドリ会修道士だが、経済学に関心が深くヴェッリらとの交友もあった。これに加えてかれは、1770年からシチリアに移りパレルモ郊外のモンレアーレで形而上学と幾何学を講じていたから⁶⁹、シチリア商業を論ずるには適任であったといえよう。かれの「序章」は、かつてギリシア人、フェニキア人の植民地と

してさかえ、ローマの最初の属州としてその穀倉であったシチリアにふさわしく、「アテネとローマの最盛期」にまでさかのぼる。「要するにシチリアは、あの幸福な時代には、その幸いな位置、価値ある産物、勤労（industria）、商業によって世界中の関心をあつめることを知っており、地中海でもっとも肥沃で、幸福かつ有名な島とよばれるに値することをころえていた。……古代シチリア人は土地の自然的肥沃さにあまんじず、それに技芸（arte）、労働（travaglio）、勤労（industria）の働きをくわえた。そこでは航海の繁栄をたもつよう、つねに手が入れられていた」⁷⁰。

コンスタンティヌス（Constantinus I, Flavius Valerius, ?280-337）の東方遷都以降、ヴァンダル族、ゴート族の侵入によってシチリア商業の衰退がはじまり、サラセン人の侵略と抑圧によって無気力と怠惰がうまれた。しかし「シチリアは力強い（virtuosi）ノルマン人によって、サラセン人のくびきを振りおとし、シチリアに平和と自由が回復するとともに、学問、技芸、立法、経済政策（economia politica）、製造業、農業がふたたび繁栄した」。ノルマンに続きシュタウフェン家、アラゴン家、ハプスブルグ家、ブルボン家とうつりかわる支配者たちは、シチリア経済の振興をはかったのだと称讃してから、ビアンキは「臣下（vasalli）」も君主にならえ、という。しかし、ビアンキの期待はうらぎられ、「多くの者は、あの何ともならない無気力と冷淡さで自分の利益をはかっている」。ビアンキは続けて、「奢侈と怠惰のなかの衰弱は、習俗の腐敗の結果にとどまらず、国家の退廃の、あまりに間近な原因である。活動と意欲は大地が労働を強いる住民にのみ割当てられており、勤労の気風は、南方の悦楽のなかに生き、大地からほとんど無償でその実りを贈られる人びとのものでない、と考えることは誤りである」とのべる⁷¹。

ビアンキによれば、イワシ、マグロなどの海産物にはじまり、小麦、柑橘類、オリーブ油のほか、家畜、香料、ナッツ、サトウキビ、岩塩など、シチリアは豊かな物産にめぐまれている。「ここには、何か特定の種類の商品を生産しないほど、肥沃でなく実り豊かでない町や村は存在しない。〔シチリア〕王国から輸出できる商品は60種以上であり、勤労と労働が増大すれば、その数もふえるであろう」。「好都合な状態に満足し、豊かな気候風土にたよってはいならない。取引の増大、技芸の完成に意をもちいなければ、商人と職人が衰弱し、土地所有者も衰弱して、すぐに国家の退廃をみるであろう。商業が、われわれの富とわれわれの光輝の真の源泉なのである」⁷²。

ビアンキとダンドロをくらべれば、シチリアとヴェネツィアという対象の違いを反映して、議論の内容にことなる面がある。シチリアは王国であったから、地主は、強固な独立性をもっていたとはいえ、王の臣下たる封建領主としてあらわれるし、ヴェネツィアは共和国であったから、同じ地主でも、人格的な忠誠の対象をもたない都市貴族である。ヴェネツィア貴族は、商人がいわゆる「再封建化（rifeudalizzazione）」⁷³のなかでイタリア本土の封土を購入して領主化したものだから、商業に従事した経験をへており、ダンドロはその歴史的経験に訴

えることができた。このような歴史的経験をもたないシチリアでビアンキは、地主としての封建領主にたいして、かれらの時代をとびこし古代の例に依拠して、商業化と地主の利益の相互依存を説かねばならなかった。かれの「序論」では、ダンドロにみられるような、地主と商業の経済関係をめぐる議論はみられず、奢侈と怠惰におぼれる地主への論難と、その裏返しであるかれらへの期待の表明がめだつ。

第3版の「出版者」の序文は、この地域的差異の存在に注意をはらわないまま、商人の土地への回帰が衰退の原因というダンドロの議論は、ヴェネツィアだけでなくイタリア全体にあてはまるという。それゆえに第2版は、シチリアで出版されたのであり、三度ヒュームのイタリア語訳を世に出すにあたって、ダンドロとビアンキの論説をともに再録するのである。⁷⁴

以上の3種の序文ないし序論の検討から、『政治論集』イタリア語訳の刊行と流布をうながしたものは、商業社会化の過程における地主の社会的役割への関心であったことがわかる。この関心の所在はイタリア語の訳文にもあらわれるが、『政治論集』そのものに1752年の初版以来、内容の変更があるので⁷⁵、訳文の検討にはいるまえに、イタリア語訳初版の英文テキスト（以下ヴェネツィア版とよぶ）の底本を確認しておく必要がある。

IV

『政治論集』の変更のうち、もっとも目立つのは、ヒュームの著作集である『諸主題論集』の1760年版⁷⁶における、「貿易上の嫉妬について」の追加と「奢侈について」の「技芸の洗練について」への題名の変更である⁷⁷が、前節にみたヴェネツィア版の収録論説から、この変更がとりいれられていることがわかる。したがって底本となる可能性があるのは、『諸主題論集』の1760年版、1764年版⁷⁸、1767年版⁷⁹である。ヴェネツィア版と同年の出版になる67年版が利用された可能性はすくないが、念のため簡単に検討しておきたい。すなわち「技芸の洗練について」の最後近く、「濫費は技術の洗練と混同されてはならない。この悪徳は文明時代にははるかに少ないとさえ思われる」から「いうまでもなく、未開時代に支払われていた高利は、土地貴族（landed gentry）の財産を速かに消費し、かれらの窮乏を増加させている」までは、67年版での本文への追加部分である。この箇所はヴェネツィア版にはみられないから、その出版に当たって67年版が参照された可能性は除外してよいであろう⁸⁰。そこで煩雑にわたるが、『政治論集』のイタリアへの導入の現場に接近するという意図もこめて、60年版（60 ed.）、64年版（64 ed.）、ヴェネツィア版（Ven. Ed.）の対照表を以下にしめす。

对 照 表

	60 ed.	page	64 ed.	page	Ven. ed.	vol., page
1	on accidents, and chances,	5	on accidents and chances,	282	on accidents and chances,	I, 6
2	the difference betwixt	5	the difference between	282	the difference between	I, 6
3	their own interest, in this respect,	10	their own interest in this respect,	286	their own interest in this respect,	I, 22
4	And, notwithstanding	11	And notwithstanding	287	And notwithstanding	I, 24
5	the more difficult will	13	the more difficulty will	288	the more difficulty will	I, 28
6	some refinements in the liberal arts;	28	some refinements in the liberal;	299	some refinements in the liberal arts;	I, 68
7	the whole society divides into	37	the whole society is divided into	305	the whole society is divided into	I, 92
8	like the Gothic barons	37	like the antient barons	306	like the antient barons	I, 92
9	The house of Commons	38	The house of Commons	306	The House of Commons	I, 94
10	the hands of the Commons	38	the hands of the commons	306	the hands of the Commons	I, 94
11	But the greater plenty of money is very limited	45	But the greater plenty of money, is very limited	312	But the greater plenty of money, is very limited	I, 112
12	by the increasae of trade and money, is, in many respects,	46	by the increasae of trade and money, is, in many respects,	313	by the increasae of trade and money, is in many respects,	I, 116
13	be more advantageous than such a one	47	be more advantageous, than such a one	314	be more advantageous, than such a one	I, 118
14	'Tis enough, that I submit to	48	'Tis enough that I submit to	314	'Tis enough, that I submit to	I, 122
15	that, since the discovery of the mines	49	that since the discovery of the mines	315	that since the discovery of the mines	I, 124
16	the nick-name of POCCHI-	54	the nick-name of POCCHI-	319	the nick-name of POCHI-	I, 138
17	there is not four times	58	there is not much more than four times	322	there is not much more than four times	I, 150
18	depart from their antient	59	depart from their ancient	323	depart from their ancient	I, 152
19	And tho' this increase	59	And though this increase	323	And though this increase	I, 152
20	nearer the antient standard	59	nearer the ancient standard	323	nearer the ancient standard	I, 152
21	when men live in the antient simple manner,	59	when men live in the ancient simple manner,	323	when men live in the ancient simple manner,	I, 154

22	circulate thro' the whole	60	circulate through the	323	circulate through the	I, 154
23	is intirely empty of it	61	is entirely empty of it	324	is intirely empty of it	I, 156
24	the stated club in the inns	61	the stated club at the inns	324	the stated club at the inns	I, 158
25	little more than a farthing?	61	little more than a farthing!	324	little more than a farthing?	I, 158
26	as that above-mentioned	62	as that above mentioned	325	as that above-mentioned	I, 160
27	that pleasures' such as they	67	that pleasures, such as they	330	that pleasures, such as they	I, 172
28	I have been informed...	67, note		330	I have been informed...	I, 174, note
29	from antient papers and records,	67, note		330	from ancient papers and records,	I, 174, note
30	thro' every corner of the state; and at the same time, by their frugality,	72	thro' every corner of the state: and at the same time by their frugality,	334	thro' every corner of the state: and at the same time by their frugality,	I, 188
31	diminishes both interest and profit;	74	diminishes both interests and profits;	335	diminishes both interest and profit;	I, 194
32	little inferior to a demonstration,	75	little inferior to a demonstration.	336	little inferior to a demonstration.	I, 194
33	great abundance of the precious metals,	75	great abundance of the precious metals.	336	great abundance of the precious metals.	I, 196
34	which signify f[i]gs and d[i]scoverer	81-82	which signify figs and discoverer	341	which signify figs and discoverer	II, 4
35	There are proofs in many old acts of the SCOTCH parliament of the same ignorance in the nature of commerce.	82	There are proofs in many old acts of parliament of the same ignorance in the nature of commerce, particularly in the reign of EDWARD III.	341	There are proofs in many old acts of the SCOTCH parliament of the same ignorance in the nature of commerce.	II, 4
36	are gross and palpable: But	82	are gross and palpable; But	342	are gross and palpable; But	II, 4
37	The customhouse-books are owned to be	83	The customhouse-books are allowed to be	342	The customhouse-books are allowed to be	II, 6
38	But, luckily,	83	But luckily,	343	But luckily,	II, 8
39	which must be owned disadvantageous	84	which must be owned to be disadvantageous	343	which must be owned to be disadvantageous	II, 8
40	all the money in BRITAIN were multiplied	85	all the money of BRITAIN were multiplied	344	all the money of BRITAIN were multiplied	II, 12

41	and must for ever in all the neighbouring nations,	85-86	and must for ever, in all the neighbouring nations,	344	and must for ever, in all the neighbouring nations,	II, 14
42	to explain the necessity of this operation.	88	to explain the necessity of this operation.	346	to explain the necessity of a this operation.	II, 20
43	thro'out this discourse,	90, note	throughout this discourse,	347, note	through out this discourse,	II, 26, note
44	the open commerce which he recommends	91	the open commerce which he recommends.	349	the open commerce which he recommends;	II, 30
45	with which we are in this kingdom so much infatuated.	92	which are so much practised in this kingdom.	349	with which we are in this kingdom so much infatuated.	II, 32
46	can be more shortsighted	92	can be more short-sighted	349	can be more short-sighted	II, 32
47	By our wise politics,	93	By our present politics,	350	By our present politics,	II, 36
48		95	It must, however, be confessed, ... which he replaces at his convenience. / After this practice had taken place ... will not now amount to a fifth of that sum.	351-353	It must, however, be confessed, ... which he replaces at his convenience. / After this practice had taken place ... will not now amount to a fifth of that sum.	II, 42-50
49	But as our darling projects of paper-credit are pernicious, being alomost the only expedient	95	But as our projects of paper-credit are almost the only expedient	353	But as our darling projects of paper-credit are pernicious, being alomost the only expedient	II, 50
50	The fluid, not communicating with	95	The fluid not communicating with	354	The fluid, not communicating with	II, 50
51	would dissipate its wealth on dangerous and ill-corrected projects;	96	would dissipate its wealth in dangerous and ill-corrected projects;	354	would dissipate its wealth in dangerous and ill-corrected projects;	II, 52
52	The fluid in this case,	96	The fluid, in this case,	354	The fluid, in this case,	II, 52
53	that tho' all historians agree in relating uniformly	96	that though all historians agree in relating uniformly	354	that though all historians agree in relating uniformly	II, 54

54	'Tis indeed probable, that that sum might be	97	'Tis indeed probable, that that sum might be	354	Tis indeed probable, that that sum might be	II, 54
55	by a cunning, rapacious, frugal, and almost arbitrary monarch?	97	by a cunning, rapacious, frugal, and almost absolute monarch?	354	by a cunning, rapacious, frugal, and almost absolute monarch?	II, 54
56	at this time so opulent, tho' that canton	99	at this time so opulent, though that canton	356	at this time so opulent, though that canton	II, 60
57	and so much the less, that the historian says,	99-100	and so much the less, because the historian	357	and so much the less, because the historian	II, 62
58	the frugality of the AEGYPTIAN monarchs,	100	the frugality of the EGYPTIAN monarchs,	357	the frugality of the AEGYPTIAN monarchs,	II, 62
59	which the author of the world has intended,	100	which the Author of the world has	357	which the Author of the world has	II, 64
60	The manufacture of ale, beyond the agriculture,	101-102	The manufacture of ale beyond the agriculture,	358	The manufacture of ale beyond the agriculture,	II, 68
61	If they lose their trade, industry, and people,	102	If they lose their trade, industry and people,	358	If they lose their trade, industry and people,	II, 68
62	they a'so got the profits and money	102	they also got the profits and money	358	they also got the profits and money	II, 70
63	For above a thousand years, the money of Europe	103	Far above a thousand years, the money of Europe	359	For above a thousand years, the money of Europe	II, 70
64	The inhabitants having become opulent and skilful,	107	The inhabitants, having become opulent and skilful,	363	The inhabitants, having become opulent and skilful,	II, 80
65	large importations from every foreign nation.	108	large importations from every foreign country.	363	large importations from every foreign country.	II, 82
66	such as the woollen manufacture is to England?	108	such as the woollen manufacture is to ENGLAND?	363	such as the woollen manufacture is to ENGLAND?	II, 82
67	than if they enjoyed one single great manufactory,	109	than if they enjoyed one single great manufacture,	364	than if they enjoyed one single great manufacture,	II, 84
68	to which every particular species of	109	to which every particular branch of	364	to which every particular branch of	II, 84

69	is such a one as Holland,	109	is such a one as HOLLAND,	364	is such a one as HOLLAND,	II, 86
70	The Dutch, having mortgaged all their revenues,	110	The DUTCH, having mortgaged all their revenues,	364	The DUTCH, having mortgaged all their revenues,	II, 86
71	among the great powers of Europe.	110	among the great powers of EUROPE.	365	among the great powers of EUROPE.	II, 88
72	that prevails in Morocco and the coast of Barbary.	110	that prevails in MOROCCO and the coast of BARBARY.	365	that prevails in MOROCCO and the coast of BARBARY.	II, 88
73	but as a British subject,	110	but as a BRITISH	365	but as a BRITISH	II, 88
74	the flourishing commerce of Germany, Spain, Italy, and even France itself.	110	the flourishing commerce of GERMANY, SPAIN, ITALY, and even FRANCE itself.	365	the flourishing commerce of GERMANY, SPAIN, ITALY, and even FRANCE itself.	II, 88
75	that Great Britain, and all other nations,	110	that GREAT BRITAIN, and all other nations,	365	that GREAT BRITAIN, and all other nations,	II, 88
76	An attentive disinterested legislature will observe the point,	128-129	An attentive disinterested legislature, will observe the point	379-380	An attentive disinterested legislature, will observe the point,	II, 100
77	The antient republics of GAUL	134	The ancient republics of GAUL	383	The ancient republics of GAUL	II, 114
78	And they having before their eyes,	134	And they, having before their eyes,	384	And they, having before their eyes,	II, 116
79	it should embrace maxims, large, durable, and generous, suitable to the	135	it should embrace maxims, large, durable, and generous, agreeable to the	384	it should embrace maxims, large, durable, and generous, agreeable to the	II, 118
80	plunder by sea and land.	136	devastation by sea and land.	385	devastation by sea and land.	II, 118
81	According to antient maxims,	136	According to ancient maxims,	385	According to ancient maxims,	II, 118
82	and atoned, in some degree,	136	and attoned, in some degree,	385	and attoned, in some degree,	II, 120
83	As, indeed, what human evil is there,	138	As indeed, what human evil is there,	386	As indeed, what human evil is there,	II, 126
84	Where-ever any profitable undertaking	138	Wherever any profitable undertaking	387	Wherever any profitable undertaking	II, 126
85	Bank-stock, or INDIA bonds,	138	Bank-stock, or India-bonds,	387	Bank-stock, or India-bonds,	II, 126

86	who are half-merchants, half-stock holders,	139	who are half-merchants, half-stock holders,	387	who are half-merchants, half stock-holders,	II, 128
87	are a check upon industry, highten the price of labour, and are an oppression	141	are apt to be a check upon industry, to highten the price of labour, and to be an	389	are apt to be a check upon industry, to highten the price of labour, and to be an	II, 134
88	suitable to the way of living of the people,	143	agreeable to the way of living of the people,	390	suitable to the way of living of the people,	II, 138
89		144	Suppose the public once fairly brought to [this and following five paragraphs to] have been able to invent.	391-394		II, 142
90	have such powerful interest as few are able to resist.	149, note	have such powerful influence as few are able to resist.	398, note	have such powerful interest as few are able to resist.	II, 158, note
91	The heights of popularity and patriotism	149, note	The heights of popularity and patriotism	398, note	The heights of popularity and, patriotism	II, 158, note
92	have all justly esteemed	151	have all justly esteemed	399	have IIa justly esteemed	II, 164

異同は、数え方にもよるが、掲出したように92箇所である。対照表では、60年版と64年版の異同の箇所につき、ヴェネツィア版に一致するように網掛けをしておいたが、60年版との一致は17箇所、64年版との一致は65箇所である。のこる10箇所は、ほとんどのばあいヴェネツィア版の誤植によって、テキストが先行2版本とことなる。ヴェネツィア版の編集者は64年版での変更配慮し、6, 25番のように見落としと思われるものもあるが、たとえば1～5番にみられるように、当然ながら綴りからカンマなどの記号まで注意をはらっていた。また16番では、「貨幣について」の原注で「イタリア人はマクシミリアン皇帝に一文無しというあだ名をつけた」⁸¹という文章につき、先行2版本のイタリア語の綴りの誤りを訂正もしている。

ところが「貿易差額について」において、35、45、49番のように、明瞭な文章の変更を無視して60年版が採用されているかと思えば、48番では「しかしながら、ここで認めなければならないことだが、貿易と貨幣に関する問題はすべてきわめて複雑であるから、紙券信用と銀行との長所がそれらの短所にまさることを示すように、この問題を考えることができるような観点も確かに存在する」⁸²にはじまり、スコットランドの銀行信用を解説した長い2パラグラフは、64年版での増補がとりいれられている。「公信用について」では、89番に示したように、「いまかりに、国家が非常に驚くべき速さで到達を急いでいる上述の状態〔公債の過剰発行〕に、いったん実際に達したものと仮定しよう」⁸³からはじまるパラグラフ

以下、6パラグラフの追加部分は、ヴェネツィア版には存在しない。

以上の検討から、ヴェネツィア版は、一種の海賊版だが、60年版を基礎に64年版での変更を部分的にとりいれた独特の版本である、ということができる。こういう措置がとられるにいたった具体的な経緯は今のところ不明であるが、ヴェネツィア版の編集とその翻訳をつうじて、ヒュームの多面的な見解のうちイタリアの読者に紹介されたものとされなかったものを区分することは可能である。

ヴェネツィア版にない「公信用について」の6パラグラフのうち2番目で、ヒュームは、大都市で怠惰に暮らし、「愚かで勝手きままな奢侈による無気力状態」におちいつている公債所有者がはびこれば、「自然の手で任命される、国内の一種の独立した行政官を成す幾つかの階層の人びとが、全くなりなくなってしまう。……また国王と人民のあいだの中間勢力がすっかり排除されるため、圧制的な独裁君主制が必ず支配する。土地所有者は貧しさにゆえにさげすまれ、圧制のゆえに嫌われて、独裁君主制に全く反対することができないであろう」とのべている⁸⁴。ここでは公債所有者にたいする否定的な見方と対比して地主階級の社会的役割にたいする肯定的な評価がめだつが、このような見解はイタリアの読者からとおざけられた。これにたいして、「貿易差額について」における銀行信用にかんする叙述を、イタリアの読者は読むことができた。

この2箇所に着目して竹本は、「1764年版以降に本格化」した『政治論集』の改訂で「実質的な修正が行われたのは紙券信用論と公債論である」と整理し、64年版については、紙券信用にたいする認識を好意的な方向にあらためつつも、その一種たる「公債に関しては従来からの厳しい見解を一層強化した」とのべる⁸⁵。竹本にしたがいつついえば、64年版での変更のうち、商人の利益とむすびついた、銀行による信用創造を積極的に評価する見解だけがイタリアの読者に届けられ、公債論の変更は、地主評価のそれとあわせて、つたえられないままであった。公債についてヒュームは、すでにみたイタリア語訳の3種の序文ないしは序論の問題意識にちょうど対応して、次のように商人の地主化をふせぐ積極的な役割を認めている。すなわち「もし公債がなかったならば、大貿易商人は、土地を購入する以外に、その利潤の一部を物に換えたり遺贈したりする手段を持たないであろう。それに土地には公債とくらべて多くの不利な点がある。……しかも土地には、それが与える多くの自然的なよろこびと権威とにより、人びとをひきつけるところがきわめて大きいため、それはやがて市民を地主（country gentleman）に変える」⁸⁶。ヴェネツィア版のテキストでは、この文言は当然ながら存在するが⁸⁷、公債所有者の怠惰にたいする論難と一体化した地主擁護の文章はみられないという結果になった。

地主の社会的位置について、ヒュームは「技芸の洗練について」で、「粗野な未開国民」と近代社会を比較して、前者においては、技芸はなおざりにされ農業しか知られず、土地所有者の圧制と農民の隷属が一般的であった、とする。続けて、次のようにいわれる（以下ふ

たつの引用文中の番号と下線は、堀田による)。

「しかし、奢侈が商業と勤労とを育成するところでは、農民は①土地の適切な耕作 (a proper cultivation of the land) で富裕になり独立する。一方②商工業者 (the tradesmen and merchants) は③財産 (the property) の分け前を獲得し、公共の自由のも最もすぐれた最も強固な基礎である、あの中産階級に権威と尊厳をもたらす。こうした人びとは、貧しい農民のように貧困と精神の卑屈さから奴隷状態に甘んずるということがなく、また領主 (the barons) のように他人に圧制をくわえようとも欲しないから、この欲望を充足させるために君主の圧制にしたがう気にもならない」。

この引用部分のイタリア語訳は、こうである。

「しかし、奢侈が商業と勤労とを育成するところでは、農民は①自分の土地 (il proprio Terreno) を耕作して富裕になり独立する。一方②貿易業者と商人 (i Trafficanti ed i Mercadanti) は③農民の土地所有 (la proprietà delle terre de'Contadini) の分け前を獲得し、自由の最もすぐれた最も強固な基礎である、あの中産階級に権威と尊厳をもたらす。かれらは、領主 (i Baroni) がするように奴隷状態にしたがわせはしない。そこで、他人に圧制をくわえようとも欲しないから、この欲望を充足させるために君主の圧制にしたがう気にもならない」⁸⁸。

ヒュームの議論は、農工分業の展開を前提にしたものである。ところが、上の①、②、③の箇所をみると、誤訳とまではいえないにしても、イタリア語訳では、農工分業の過程は後景にしりぞき、土地所有への関心が前面にでる傾向があるといえよう。次に2箇所の下線部はイタリア語訳で脱落し、その結果ヒュームの原文における貧困な農民の奴隷状態が、領主の抑圧の意味に誤訳され、領主の恣意的な支配が相対的に強調されることとなる。このような翻訳の過程における意味の変容は、訳者ダンドロにとって商業と勤労による文明化の歴史的過程の停止もしくは逆転という事態の打開が第1の関心事であったことを表現するもの、と理解してよいだろう。

同様の事情は、「利子について」でもみいだすことができる。ヒュームは利子率決定の原因として、借入需要、それへの供給、商業の利潤の3条件をあげ、これらの条件は、貨幣量の豊富さではなく、商業と勤労の発展度によって左右されるとして、第1の「借入需要の大小の原因と結果から」検討をはじめめる。かれによれば、未開状態から脱すると不平等が生じて、人間たちは土地をもつ者ともたない者にわかれ、前者が安定した統治の担い手となる。しかし地主の習俗は浪費に傾きやすい。続いて、こういわれる (以下ふたつの引用文中の番号は、堀田による)。

「したがって、①土地所有者階級 (a landed interest) しかいない国では、節約がほとんどおこなわれないので、②借手 (the borrowers) がきわめて多いはずであり、利子率はそれに比例するに違いない。その差異は、貨幣量にではなく、一般に広まっている慣習と生活様

式とに依存する。③借入需要 (the demand for borrowing) の増減はもっぱらこれによるのである。たとえ卵 1 個を 6 ペンスで売らせるほどに貨幣が豊富であるとしても、その国に土地貴族 (landed gentry) と小作人とだけしかいない限り、④借手 (the borrowers) は多く⑤利子は高い (interest high) に違いない。同じ農場に対する地代でも、より重くより多いことであろう。ところが、地主 (the landlord) のこの怠惰こそは、財貨の高価格とあいまって、同時に⑥地代を濫費させる (dissipate it) であろうし、ちょうどそれだけ⑦借入 (borrowing) にたいする必要と需要とをうみだすであろう」。

この箇所 of イタリア語訳は、次のようである。

「したがって、①土地以外の利益がない (altro interesse non siavi che quello de' terreni) 国では、節約がほとんどおこなわれないので、②貨幣を借りる人 (queglino che accattano danari) がきわめて多いはずであり、利子率はそれに比例するに違いない。その差異は、貨幣量ではなく、一般に広まっている慣習と生活様式とに依存する。③借入需要 (la ricerca di pigliare in prestito) の増減はもっぱらこれによるのである。たとえ卵 1 個を 6 ペンスで売らせるほどに貨幣が豊富であるとしても、その国に土地所有者 (i Proprietarj delle terre) と小作人とだけしかいない限り、④貸手 (li prestatori) は多く⑤利益は高い (l'interesse sarebbe grande) に違いない。同じ農場がより多くをもたらしことであろう。ところが、地主 (il proprietario) のこの怠惰こそは、財貨の高価格とあいまって、⑥短い期間に生産物そのものを消滅させるであろう (distruggerebbe in poco spazio di tempo i prodotti stessi) し、ちょうどそれだけ⑦借入 (le prestanze) にたいする必要と需要とをうみだすであろう」⁸⁸。番号をつけた箇所のうち、④は原文の「借手」がイタリア語訳では「貸手」と、反対の意味になっている。同じ「借手」ないし「借入」の訳について検討すると、②、⑦は問題なく③は意識の範囲にはいるだろうし、この引用に付された注など他の箇所にも間違いはみあたらない。また「このようにして、商業の増大は、必然の結果によって多数の貸手をつくり出し、それによって低利子を生み出す」という命題の訳出にも、問題はない⁸⁹。したがって誤訳の原因が、訳者ダンドロの不注意、または語学力の不足や狭義の理論的理解の不十分さによる、単純な意味の取り違えにあるとは考えにくく、根本の原因は、「インタレスト (interest, interesse)」という用語の理解そのものにある、と思われる。

①の箇所は、読者の便宜をはかった意識ともとれるが、おなじパラグラフのすこし前にある、「このようにして土地所有者階級 (the landed interest) が直ちに確立する」は単純な直訳で「土地のインタレスト (l'interesse delle Terre)」とされている⁹¹。「貨幣所有者階級 (the monied interest)」も同様に「貨幣のインタレスト (l'interesse del danaro, l'interesse del danajo)」である。「大貨幣所有者階級を構成する (compose a great monied interest)」という文言は、言葉をおぎなって「両替によってそこ〔集積された貨幣財産〕からおおきな利益をあげる (col giro ne componga un grand'interesse)」と訳出されたから、続く「このこと

は多数の貸手を生み出して利子率を引き下げる」の訳文は妥当であっても⁹²、⑥の箇所を意識にみられるように、かえって貨幣資本と生産活動のつながりはとらえがたくなる。いいかえれば農工分業の展開をささえる貨幣資本の蓄積がないところで「商業がなければ、国家は、主として、その浪費と出費とが不断の借入需要を生み出す土地貴族とその需要をみたす金額をもたぬ小作人とから成り立つに違いない」⁹³という事態だけがきわだつのである。

この事態に、訳者ダンドロの序文での叙述をかさねれば、商業によって蓄積された資本は、一方で土地の購入にあてられ他方で寄生的な貸付資本となる、といえる。このばあい、貨幣の借手である怠惰な地主は、債務の返済について最終的には地代収入に依存するしかないであろう。債務者はおそらく地主だから、貸付資本の利子も地代に帰着する。それゆえに、ヒュームにおいて貨幣の借手としてあらわれた地主について、ダンドロが土地の「貸手」という本来の性格を再確認しなければならなかったのであり、上のイタリア語訳からの引用文における④⑤⑥の箇所は、「インタレスト」を地代と理解すれば、意味がつうじる。ダンドロの眼は、利子＝地代の収奪と浪費による貧困化の過程にがむけられていた、といってよい。学説史の系譜をふりかえれば、翻訳における意味の変容のなかにしめされた、「インタレスト」の理解は、むしろ自然である。こうして地主の怠惰による地代の浪費が眼前の現状であれば、論説「技芸の洗練について」のイタリア語の題名に、「奢侈について」という64年版における改題以前の伝統的な用語法が保存されているのも不思議でない。

習俗の腐敗にかかわる奢侈論という問題設定は、経済学の世界とイタリアの現実との接点をなし、第1節で検討したように、パニーニは軍事的富の支出に依存する、ローマ社会における奢侈を否定し、ガリアーニとは異なって、生産力的基礎をもった商業的富が、近代社会の発展を保証するという見通しをもった。第2節、第3節でみた人口論争における近代社会優位論への傾斜も、この見通しにささえられていた、といってよいであろう。商業的富の発展への道を、地域的差異がみられるとはいえ、イタリアは歩みだしていたはずであった。だが、その行程で地主の奢侈という問題があらわれる。ローマの軍事的原理へ戻ることはすでにできないから、商業の原理である経済学によって地主の奢侈の社会的性格を解明し、商業の原動力である利己心による私益の追求が、怠惰な浪費という有害な奢侈から、社会の利益を増進する無害な奢侈へ転換する回路を発見しなければならない。ヒュームの『政治論集』は、経済学の成立を展望し前進すべき方向をしめすことで、道を踏み誤った地点をさぐる手がかりをあたえたのである。

付記

この論文は、アダム・スミスの会、第155回例会（1997年4月19日）におけるわたくしの報告「18世紀イタリアにおけるイギリス経済思想」（要旨は、『アダム・スミスの会会報』第65号、1998年に掲載）の関係部分を原型としている。報告の機会をあたえてくださった方がたに、あらためて感謝いたします。

す。また文献の収集と閲覧に便宜をはかってくださった、大阪大学附属図書館、大阪商業大学図書館、中央大学図書館、一橋大学社会科学古典資料センター、ルイジ・エイナウディ研究所図書館、名古屋経済大学図書館に、お礼申し上げます。

(ほった せいぞう 名古屋経済大学経済学部教授)

注

- 1 [Ferdinando Galiani], *Della moneta. Libri cinque*, Napoli, Giuseppe Raimondi, 1750 [1751], reprint, Düsseldorf-Darmstadt, Wirtschaft und Finanzen, 1986. Furio Diaz, 'Preliminari' a *Della moneta*, in Ferdinando Galiani, *Opere*, a cura di Furio Diaz and Luciano Guerri, Milano-Napoli, Ricciardi, 1975, p. 3. によれば、初版の出版年の表示は1750年とされているが、実際の刊行は1751年9月であった。*Catalogo della Biblioteca di Luigi Einaudi*, a cura di Dora Franceschi Spinazzola, Torino, Fondazione Luigi Einaudi, 1981, 2 voll. (n. 2329). および *Italian Economic Literature in the Kress Library 1475~1850*, compiled by P. Barucci and K. Carpenter in collaboration with A. Calcagni Abrami and R. Reinstein Rogers, Rome, Banco di Roma, 2 vols. (n. 269). をも参照せよ。後者の『クレス文庫所蔵イタリア経済文献目録』は、『貨幣について』初版のクレス文庫所蔵本とゴールドスミス文庫所蔵本のあいだに1箇所かなり大きな異同があることを指摘し、テキストを掲載している (vol. I, p. 269.). それによれば、クレス本における、評判、名誉、富をもとめる傾向は、人間本性にかなっているという趣旨の率直な表現が、ゴールドスミス本では撤回されている。この箇所については、上にしめした初版の複製版 (p. 31.)、初版を底本とする著作集版 (*Opere cit.*, p. 45.)、第2版 (Ferdinando Galiani, *Della moneta. Libri cinque di Ferdinando Galiani, edizione seconda*, Napoli, Stamperia Simoniana, 1780.) を底本とするメローラ版 (Ferdinando Galiani, *Della moneta e scritti inediti*, con introduzione di Alberto Caracciolo e a cura di Alberto Merola, Milano, Feltrinelli, 1963, p. 41.) のテキストは、どれもゴールドスミス本にひとしい。
- 2 John Locke, *Ragionamenti sopra la moneta, l'interesse del danaro, le finanze e il commercio scritti e pubblicati in diverse occasioni dal Signor Giovanni Locke. Tradotti la prima volta dall'inglese con varie annotazioni*, Firenze, Andrea Bonducci, 1751, 2 voll.
- 3 ガリアーニの経済思想については、堀田誠三『ベッカリーアとイタリア啓蒙』名古屋大学出版会、1996年、第2章補論をみよ。ロックの経済思想にかんする文献は数多いので、ここでは生越利昭『ジョン・ロックの経済思想』晃洋書房、1991年をあげるにとどめる。
- 4 Galiani, *Della moneta*, in *Opere cit.*, pp. 140 e 143. 引用は143ページ。
- 5 *Ibid.*, pp. 249-256. 引用は249, 254, 256ページ。利子論にかんしてガリアーニが言及している著作家は、ロックとベネディクトゥス14世のほかに、ザルマシウス (Claude de Saumaise, Claudius

Salmasius, 1588-1653)、ブルーデルセン (Nicolaus Broederssen, ?-?)、マッフエイ (Francesco Scipione Maffei, 1675-1755)、コンチア (Daniele Concia, 1687-1756) である。ヴェントゥーリは、1720年代にはじまったオランダにおける徴利論争を集大成したのがブルーデルセンであるとし、続いて40年代のイタリアでおこなわれたマッフエイ以下の著者たちによる論争を、大勅書をふくめて、跡づけている (Franco Venturi, *Settecento riformatore. Da Muratori a Beccaria*, Torino, Einaudi, seconda ed. 1972 [prima ed. 1969], pp. 118-136.)。なお徴利の是非論については、高木暢哉『利子学説史』日本評論社、1942年、第2章～第4章を参照せよ。

6 国権主義については、堀田、前掲書、序章、第1章をみよ。

7 Galiani, *Della moneta*, in *Opere cit.*, p. 256.

8 *Ibid.*, p. 279. ガリアーニの訳稿は、メローラ版 (Galiani, *Della moneta e scritti inediti cit.*, pp. 380-389.) に収録されている。訳者序文によれば、1691年刊行の「利子引き下げおよび貨幣引き上げ」にかんする論説と、ラウンズにたいする反論である「さまざまな貨幣の価値の引き上げにかんするロック氏の新考察」を、利子論と貨幣論という主題別に整理した ('Avviso dei traduttori al lettore' in Locke, *Ragionamenti sopra la moneta cit.*, pp. xii-xvii and xxii.)。テキストの再構成については、さしあたり 'Checklist of Printing', in *Locke on Money*, edited together with Ancillary Manuscripts, an Introduction, Critical Apparatus, and Notes by Patrick Hyde Kelly, Oxford, Clarendon Press, 1991, vol. I, pp. 161-162. をみよ。

9 第2巻の表題には、以下のようにパニーニの論考の収録が明示してある。John Locke, *Ragionamenti sopra la moneta [...] e con un Discorso sopra il giusto pregio delle cose e della moneta e il commercio de' Romani*, tomo secondo, Firenze, Andrea Bonducci, 1751.

10 [Giovanni Francesco Pagnini], *Saggio sopra il giusto pregio delle cose, la giusta valuta della moneta e sopra il commercio dei Romani*, pp. 5-8. この表題は本文中のものであり、前注9に掲げた扉の表記とは違いがある。引用は7, 8ページ。「道徳的量」について著者は、プーフェンドルフ『自然法と万民法』(1672年)の参照をもとめている。プーフェンドルフの経済思想については、新村聡『経済学の成立』お茶の水書房、1994年、第3章をみよ。

11 *Ibid.*, pp. 17, 23, 25, 26, 29, 30, 36, 40, 95 e 112.

12 *Ibid.*, pp. 26 e 36. 引用は26ページ。

13 *Ibid.*, pp. 53-54 e 75-76.

14 *Ibid.*, pp. 73-74 e 77.

15 *Ibid.*, p. 85.

16 *Ibid.*, pp. 90 e 54.

17 この点については、堀田、前掲書を参照せよ。

18 同上書、64ページをみよ。

19 Pagnini, *Saggio sopra il giusto pregio delle cose cit.*, pp. 104-105 e 110-112. 引用は105, 112

ページ。

20. Galiani, *Della moneta*, in *Opere cit.*, p. 22.
21. Giovanni Francesco Pagnini e Angelo Tavanti, 'Avviso dei traduttori al lettore', in John Locke, *Ragionamenti sopra la moneta* cit., t. I, p. xxiv.
22. 次にしめすように、二人の著作にサン・ピエール (Charles-Irénée Castel de Saint-Pierre, 1658-1743) の論説 (Discours contre l'augmentation des monoyes & en faveur des annuitez) を付加したイタリア語版が1754年にでてゐる。 *Delle monete, controversia agitata tra due celebri scrittori oltremontani, i signori Melon e Dutot. Si è aggiunto in fine un opuscolo sulla stessa materia del signor abate de Saint-Pierre. Versione dall'idioma francese* [a cura di Girolamo Costantini], Venezia, Antonio Zatta, 1754. ムロンおよびデュトをふくむ18世紀フランス経済学にかんする研究動向は、米田昇平「ケネー以前のフランス経済学」『経済学史学会年報』第33号 (1995年) をみよ。
23. Pietro Verri, *Considerazioni sul commercio dello Stato di Milano*, a cura di C. A. Vianello, Milano, Università L. Bocconi, 1939, p. 3. 同じ箇所でヴェッリがあげている著作家は、イギリスからグレンシャム (Sir Thomas Gresham, 1519?-1579)、ロック (前出)、ヒューム (David Hume, 1711-1776)、フランスからヴォヴァン (Sébastien Vauban, 1633-1707)、サヴァリ (Jacques Savary, 1622-1690 および Philémon-Louis Savary, 1654-1727)、ムロン (前出)、デュト (前出)、フォルボネ (François Forbonnais, 1722-1800)、スペインからウスタリス (Gerónimo de Uztariz, 1670-1732)、ウリョア (Bernardo de Ulloa, ?-1740)、ドイツからビールフェルト (Jacob Friedrich Bielfeld, Freiherr von, 1717-1770)、イタリアからジェノヴェージ (Antonio Genovesi, 1713-1769)、パニーニ (前出)、タヴァンティ (前出)、ダヴァンツァーティ (Bostichi Bernardo Davanzati, 1529-1606)、モンタナーリ (Geminiano Montanari, 1633-1687)、カルリ (Gianrinaldo Carli, 1720-1795)、ネーリ (Pompeo Neri, 1706-1776)、ベッカリーア (Cesare Beccaria, 1738-1794) であり、くわえて本文中ではモンテスキュー (Charles Louis de Secondat, baron de La Brède et de Montesquieu, 1689-1755) とミラボー (Victor de Riqueti, marquis de Mirabeau, 1715-1789) がたびたび参照されている。これらの著作家のうちもっともすぐれているのはフォルボネであるとされているが、1771年の『政治経済学にかんする省察』 ([Pietro Verri], *Meditazioni sulla economia politica*, Livorno, Stamperia dell'Enciclopedia, 1771.) には、需給説による価格決定論と経済法則の自律性の認識について、ロックの影響がおおきい。この点について、わたくしはヴェッリ没後200年記念の学会 (Convegno "Pietro Verri e il suo tempo", Milano, 9-11 ottobre 1997) において報告 (Seizo Hotta, 'European sources of Pietro Verri's economic thought'.) した。報告集は刊行の予定である。ヴェッリの経済学については、堀田、前掲書、第5章をみよ。
24. Verri, *Considerazioni sul commercio dello Stato di Milano* cit., pp. 3-4

- 25 *Memorie per servire all'istoria letteraria*, 1753-1758.
- 26 Marialuisa Baldi, *David Hume nel Settecento italiano: Filosofia ed economia*, Firenze, La Nuova Italia, 1983, pp. 194-195; Gianfranco Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi della storiografia inglese', in *Archivio storico italiano*, anno CXXXVIII (1980), n. 505, pp. 394-396.
引用は、後者のトラブツツィ論文、396ページによる。
- 27 *Novelle letterarie*, 1740-1792.
- 28 David Hume, *Discours politiques de Monsieur Hume traduits de l'anglois* [par Jean-Bernard Le Blanc], Amsterdam-Paris, 1754, 2 vols.
- 29 David Hume, *Discours politiques de Mr. David Hume, traduits de l'anglois par Mr. de M**** [Eléazar Mauvillon], Amsterdam, J. Schreuder et Pierre Mortier, 1754.
- 30 Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi' cit., pp. 392-394.
- 31 'Préface du traducteur, a Monsieur le Docteur Lami, Professeur a Florence.', in Hume, *Discours politiques* [par Le Blanc], cit., t. I, pp. xxvii, xxvi. フィレンツェの「農学会 (Accademia dei Georgofili)」の設立 (1753年) は、同年の『新文献』誌が報じている (Renato Pasta, 'Accademia dei Georgofili e la riforma dell'agricoltura' in *Rivista storica italiana*, anno CV, fasc. 2, p. 485.)。
- 32 Vieri Becagli, 'Hume o Cantillon? A proposito di un errore ricorrente nella pubblicista italiana del Settecento', in *Ricerche storiche*, II (1976), fasc. 2, p. 515.
- 33 Baldi, *David Hume nel Settecento italiano* cit., pp. 6-7; Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi' cit., p. 396.
- 34 Cosimo Trinci, *L'agricoltore sperimentato. Opera di Cosimo Trinci che insegna la maniera più sicura di conoscere, piantare, allevare, o condurre sino dalli più teneri anni per età alla lor perfezione alcune piante più utili, e necessarie al vivere umano, con altre considerazioni intorno al tempo, e maniera di arare, e seminare le terre; e di stagionare, e di conservare l'ulive, e l'olio*, Lucca, Salvatore e Giandomenico Marescandoli, 1726.
- 35 Antonio Genovesi, *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile. Da leggersi nella Cattedra Interiana dell' ab. Genovesi regio cattedratico, parte prima nel primo semestre, parte seconda nel secondo semestre*, Napoli, Stamperia Simoniana, 1765 [1766]-1767.
- 36 この翻訳にかんする書誌情報は、第2版、第3版をふくめ、第3節本文に後述する。
- 37 David Hume, *Essais sur le commerce; le luxe; l'argent; l'interet de argent; les imports, le credit public et la balance du commerce [...]* Traduction nouvelle, avec des réflexions du traducteur [...], Paris-Lyon, Saillant, 1767.
- 38 *Giornale letterario*, 1768.
- 39 Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi' cit., pp. 401-403.

- 40 *Il Caffè ossia brevi e vari discorsi distribuiti in fogli periodici, 1764-1766.*
- 41 [Pietro Verri], 'Sulla spensieratezza nella privata economia', in < *Il Caffè* > 1764-1766, a cura di Gianni Francioni e Sergio Romagnoli, Torino, Boringhieri, 1993, p. 327, nota a.
- 42 John Cary, *Storia del commercio della Gran Bretagna scritta da John Cary, mercante di Bristol, tradotta in nostra volgar lingua da Pietro Genovesi, giureconsulto napoletano, con un ragionamento sul commercio in universale e alcune annotazioni riguardanti l'economia del nostro Regno di Antonio Genovesi, r. professore di commercio e di meccanica nella cattedra interiana. Dedicata a S. E. Romualdo Sterich de'marchesi di Cermignano*, Napoli, Benedetto Gessari, 1757 [-1758], 3 voll. この題名にあるジェノヴェージの論考には、奥田敬訳、アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論—商業についての一般的な論考—」(1757年)、一橋大学社会科学古典資料センター Study series, n. 27 (1992). がある。なおこのケアリーのイタリア語訳の成立にかんする文献的事情については、奥田訳への「訳者緒言」と訳注、奥田敬「アントニオ・ジェノヴェージ〈外国貿易論〉—『グレート・ブリテン商業史』第1巻所収「商業汎論」からの抄訳と解題」『三田経済学研究』、慶應義塾大学大学院、第33号 (1986年) ; Maria Luisa Perna, 'Bibliografia' e 'Nota critica', in Antonio Genovesi, *Scritti economici*, a cura di Maria Luisa Perna, Napoli, Istituto Italiano per gli Studi Filosofici, 1984, 2 voll., pp. 1244-1253 e 1288-1296. をみよ。また、同「18世紀ナポリ王国における『政治経済学』の形成—アントニオ・ジェノヴェージ『商業汎論』とその周辺—」(上)(下)『三田学会雑誌』79巻5・6号 (1986-87年) をも参照せよ。
- 43 Perna, 'Nota critica', in Genovesi, *Scritti economici*, cit., pp. 1293-1294.
- 44 Thomas Mun, *Tesoro del commercio di Tommaso Mun tradotto dall'inglese*, in Genovesi, *Scritti economici* cit., p.591, nota e.
- 45 Antonio Genovesi, *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile. Da leggersi nella Cattedra Interiana dell' ab. Genovesi regio cattedratico, parte seconda nel secondo semestre*, seconda edizione napoletana, Napoli, Stamperia Simoniana, 1770, pp. 83-98. 引用は83, 94ページ。わたくしはヴェントゥーリの見解 (Franco Venturi, 'Le "Lezioni di commercio" di Antonio Genovesi. Manoscritti, edizioni e traduzioni' in *Rivista storica italiana*, anno LXXII, fasc. 3.) にしたがって、著者による最終増補版である、ここに掲げたナポリ第2版を利用する。なおジェノヴェージによるマンの自由訳と『商業講義』でのヒューム論については、Seizo Hotta, 'British economic thought in eighteenth-century Italy' in *National and European Markets in Economic Thought*, edited by Piero Roggi, Louis Baeck and Gabriella Gioli, Milano, Università Bocconi, 1994, pp. 64-68. をみよ。
- 46 改革の理論としてのジェノヴェージの経済学については、奥田、前掲諸論文のほか、同「〈商業の自由〉の理念と現実—アントニオ・ジェノヴェージと1764年「大飢饉」—」『イタリア学会誌』第37号 (1987年) ; 堀田、前掲書、第2章、第3章、をみよ。

- 47 ペルナの編注 (Genovesi, *Scritti economici*, cit., p. 131, nota 12 e p. 875, nota 2.) によれば、Robert Wallace, *Essai sur la différence du nombre des hommes dans les temps anciens et modernes, dans lequel on établit qu'il étoit plus considérable dans l'antiquité, traduit de l'anglois de M. R. Wallace, chapelain de S.M.B. et membre de la Société philosophique d'Edimbourg, par M. de Joncourt, professeur de langues étrangères à Paris*, Londres, s. e., 1754. なお、前掲、奥田訳、41ページ、訳注9をも参照せよ。
- 48 Genovesi, *Scritti economici* cit., pp. 875-876.
- 49 *Ibid.*, p. 876. (Baldi, *David Hume nel Settecento italiano* cit., p. 196. を参照せよ)。
- 50 *Ibid.*, p.877. ヴェントゥーリによれば、『貨幣について』でモンテスキューを論難したガリアーニと対照的に、ジェノヴェージは『法の精神』の非常な崇拜者」(Franco Venturi, 'Nota introduttiva' a Antonio Genovesi, in *Riformatori napoletani*, a cura di Franco Venturi, *Illuministi italiani*, t. V, Milano-Napoli, Ricciardi, 1962, p. 17.) であった。しかしヴェントゥーリは、『大ブリテン商業史』に、イギリスの繁栄は風土決定論では説明できないとするジェノヴェージの見解がある (Genovesi, *Scritti economici* cit., p. 117.) ことも指摘する (Venturi, *Settecento riformatore. Da Muratori a Beccaria* cit, pp. 566-567, nota 2.) のである。ジェノヴェージとモンテスキューの関係については『法の精神』イタリア語訳へのジェノヴェージによる評注 (Montesquieu, *Spirito delle leggi del signor di Montesquieu, con le note dell'abate Antonio Genovesi*, Napoli, Domenico Terres, 1777, 4 vols.) を検討する必要がある。この主題の関連文献として Enrico De Mas, *Montesquieu, Genovesi e le edizioni italiane dello "Spirito delle leggi"*, Firenze, Le Monnier, 1971. をあげておく。人口論争とかかわるヒュームの歴史的展望については、坂本達哉『ヒュームの文明社会 一勤労・知識・自由一』創文社、1995年、第2部、を参照せよ。
- 51 ペルナの編注 (Genovesi, *Scritti economici* cit., p. 139, nota 21 e p. 498, nota 1) および奥田、前掲邦訳、訳注15、をみよ。ジェノヴェージは『大ブリテン商業史』への評注10で、ボーリングブルックの『イングランドの現状にかんする政治的論考』のフランス語訳が、ヒュームの『政治論集』第2巻に収録されていると書いている (*ibid.*, p. 498)。このフランス語訳は、ル・ブラン訳とモヴィヨン訳の双方に収録されているが、前者は第1巻に「公信用について」の補論のような位置にあり、ジェノヴェージの記述のように第2巻にあるのは後者である。ただし、この第2巻は、ヒュームの翻訳ではなく、注28にあげたモヴィヨン訳の続巻という体裁で、おなじ出版者が刊行した経済論集 (*Discours politiques. Tome second*, Amsterdam, J. Schreuder et Pierre Mortier, 1756.) であり、第3巻にはカンティロンの『商業試論』(1755年) もおさめられた。この間の事情については、Becagli, 'Hume o Cantillon?' cit., pp.516-520.; 津田内匠「解説」、同訳、R. カンティロン『商業試論』名古屋大学出版会、1992年、262-264ページ、を参照せよ。
- 52 Genovesi, *Scritti economici* cit., p. 876, nota c.
- 53 Antonio Genovesi, *Delle lezioni di commercio o sia d'economia civile. Da leggersi nella*

- Cattedra Interiana dell'ab. Genovesi regio cattedratico, parte prima nel primo semestre*, seconda edizione napoletana, Napoli, Stamperia Simoniana, 1768, p. 201, nota a. 引用文中の省略記号はジェノヴェージのものである。なおこの点については、すでに奥田、前掲「18世紀ナポリ王国における『政治経済学』の形成」(上)、97ページ、注102で指摘されている。
- 54 初版第1巻(第3節本文参照)収録の Matteo Dandolo, 'A sua eccellenza il Signor Alvise Emo, fu di Messer Giovanni, Procuratore di San Marco', p. xvi.
- 55 ダンドロによればエーモ家は、「ヴェネツィア共和国への愛が血肉となっている名高い」家柄である(Dandolo, 'A sua eccellenza il Signor Alvise Emo', in Hume, *Political Essays / Saggi politici* cit., vol. I p. xv.)。アルヴィーゼ・エーモについては、P. Del Negro, 'Alvise Emo' in *Dizionario biografico degli italiani*, vol. 42, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 1993, pp. 617-620. をみよ。
- 56 初版の表題にあるように、訳者はヴェネツィア貴族である。ダンドロ家は、11世紀以来ヴェネツィア共和国の統領や海軍提督をだした名門であるが、18世紀には市民階級との婚姻による家産増大をはかっていた。マッテオ・ダンドロは70年代には、フリー・メーソンに加入して、貴族寡頭制に反対した。かれについては、Venturi, 'Scottish echoes in eighteenth-century Italy', in *Wealth and Virtue. The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, edited by Istvan Hont and Michael Ignatiev, Cambridge et al., Cambridge University Press, 1983, pp. 354-356. (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳』未来社、1990年、594—596ページ)；P. Del Negro, 'Matteo Dandolo' in *Dizionario biografico degli italiani*, vol. 32, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 1986, pp. 495-497. をみよ。
- 57 ビアンキについては注69の箇所に後出。
- 58 Baldi, *David Hume nel Settecento italiano* cit., p. 181, nota 15 e 16; Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi' cit., p. 407, nota 60.
- 59 Baldi, *David Hume nel Settecento italiano* cit., p. 181, nota 15.
- 60 Baldi, *David Hume nel Settecento italiano* cit., pp. 175-180; Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi' cit., pp. 398-403; Franco Venturi, 'Scottish echoes in eighteenth-century Italy' cit., pp. 351-354. (前掲邦訳、590—594ページ)
- 61 Ronald Grimsley e Daisy D. Ronco, 'Corrispondenti italiani di David Hume', in *Rivista critica di storia della filosofia*, XX (1965), fasc. 3, pp. 411-412. この論文では、ダンドロのヒューム宛て手紙が、1762年5月2日付けとされており、バルディ(Baldi, *David Hume nel Settecento italiano* cit., p. 176, nota 1.)もトラブツツィ(Tarabuzzi, 'Echi italiani settecenteschi' cit., p. 398.)もそれにしたがって、1762年には翻訳がおわったものとしているが、ヴェントゥーリは、手紙の内容から刊本を原著者に送付したものとして、発信の年を1767年に変更すべきとのべている(Venturi, 'Scottish echoes in eighteenth-century Italy' cit., p. 351, note 18. 前掲邦訳、608ページ)。

ジ、注18)。ヴェントゥーリの解釈は妥当なものと思われるし、後述する初版の英文テキストの検討からも、それを支持する結果がえられる。

- 62 Dandolo, 'A sua eccellenza il Signor Alvise Emo' cit., pp. xvi e vi.
- 63 Ibid., p. vi.
- 64 Ibid., pp. viii-x. 引用は9, 10ページ。
- 65 Ibid., pp. x.-xiii. 引用は12ページ。
- 66 Ibid., p. xiv.
- 67 Ibid., p. xiii.
- 68 Ibid., pp. xii-xv. 引用は13-14, 15ページ。
- 69 F. Venturi, 'Isidolo Bianchi', in *Dizionario biografico degli italiani*, vol. 10, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 1968, pp. 132-139.
- 70 Isidolo Bianchi, 'Discorso preliminare sul commercio di Sicilia' in Hume, *Saggi politici*, seconda ed., cit., pp. iv e v.
- 71 Ibid., pp. v-vii. 引用は6, 7ページ。ローマ帝国崩壊以後の中世における、外来の支配者による統治への肯定的な評価は、現実の君主への追従という要素もあろうが、むしろイタリア啓蒙の母胎となったジャンノーネ (Pietro Giannone, 1676-1748) とムラトーリ (Lodovico Antonio Muratori, 1672-1750) に代表される国権主義の歴史叙述の伝統を、ピアンキが継承していることの証拠である。
- 72 Bianchi, 'Discorso preliminare' cit., pp. viii-xii. 引用は8, 12ページ。
- 73 17世紀に盛んであった「再封建化」については、さしあたり Giorgio Candeloro, *Storia dell'Italia moderna I*, Milano, Feltrinelli, settima ed., 1975 (prima ed., 1956), pp. 48-63; Guido Quazza, *La decadenza italiana nella storia europea. Saggi sul Sei-Settecento*, Torino, Einaudi, seconda ed., 1974 (prima ed. 1971). をみよ。
- 74 'Gli stampatori', in Hume, *Saggi politici*, terza ed. cit., n. p. この序文は、堀田、前掲書、255-256ページに紹介がある。
- 75 竹本洋「D. ヒュームの『政治論集』にかんする試論」(1)(2)『大阪経大論集』第196・197号(1990年)、を参照せよ。
- 76 David Hume, *Essays and Treatises on Several Subjects*, vol. II, *Essays, Moral, Political, and Literary*, part II, London and Edinburgh, A. Miller, A. Kincaid, and A. Donaldson, 1760. 以下にみる64年版、67年版とともに、中央大学所蔵ヒューム・コレクションを利用した。
- 77 David Hume and the Eighteenth Century British Thought. An Annotated Catalogue, Tokyo, Chuo University Library, 1986, 'Comparative table of the editions of Essays, Moral, Political and Literary', pp. xvi-xvii and editor's note, p. 17; 竹本、前掲論文(1)、55-56ページ。
- 78 David Hume, *Essays and Treatises on Several Subjects*, vol. I, *Essays, Moral, Political, and Literary*, part II, London and Edinburgh, A. Miller, A. Kincaid, and A. Donaldson, 1764.

- 79 David Hume, *Essays and Treatises on Several Subjects*, vol. I, *Essays, Moral, Political, and Literary*, part II, London and Edinburgh, A. Miller, A. Kincaid, and A. Donaldson, 1767.
- 80 Hume, *Essays*, 1760 cit., p. 41; do., *Essays* 1764 cit., p. 309; do., *Essays* 1767 cit., p. 309; do., *Political Essays* cit., vol. I, p. 104. 田中敏弘訳『政治経済論集』お茶の水書房、1983年、31ページ。この箇所追加についてはグリーン＝グロウスによる指摘があるが、かれらは67年版ではなく1768年版を参照している (David Hume, *The Philosophical Works*, edited by Thomas Hill Green and Thomas Hodge Grose, second reprint of the new edition London 1882, Aalen, Scientia, 1992, vol.3, p.309.)。『政治論集』の校訂にかかわる諸問題については、竹本、前掲論文 (1)、44-50ページをみよ。
- 81 前掲邦訳、41ページ。訳文には修正した箇所がある。また対照表にかかげた箇所については、以下邦訳のページ数のみをあげる。
- 82 同上、74ページ。
- 83 同上、118ページ。
- 84 同上、118-119ページ。
- 85 竹本、前掲論文 (2)、33、35ページ。
- 86 Hume, *Essays*, 1760 cit., pp. 139-140; do., *Essays* 1764 cit., pp. 387-388. 前掲邦訳、114ページ。最後の文の「土地(it)」はイタリア語訳では「別邸 (villa)」となっている (次注参照)。
- 87 Hume, *Political Essays/Saggi politici* cit., vol. II, pp. 128,130/ pp. 129,131.
- 88 *Ibid.*, vol., I, pp. 92,94/ pp.93, 95. 前掲邦訳、27-28ページ。この箇所については、Hotta, 'British economic thought' cit., p. 69. で言及した。以下、必要におうじて、注にル・ブラン訳 (Hume, *Discours politiques*, tr. par Le Blanc cit. - LB と略す) とモヴィヨン訳 (Hume, *Discours politiques*, tr. par Mauvillon cit. - M と略す) をかかげる。① une culture convenable de la terre (LB, I, p. 79.); cultivant son champ (M, p. 40.)、② les Négocians & les Marchands (LB, I, p. 79.); le Négociant & le Fabriquant (M, pp. 40-41.)、③ propriété (LB, I, p. 79.); la propriété des terres (M, p. 41.)。①、③のように土地所有にかんして、ダンドロ訳はモヴィヨン訳に近いが、次注からもわかるように、2種のフランス語訳を単純に踏襲するものではない。
- 89 Hume, *Political Essays/Saggi politici* cit., vol. I, pp. 172, 174/ pp. 173, 175. 前掲邦訳、52ページ。フランス語訳は、① autre intérêt que celui de terres (LB, I, p. 145.); autre intérêt que celui des Biens-fonds (M, p. 75)、② les Emprunteurs (LB, I, p. 145.); le nombre des Prêteurs (M, p.75)、③ la demande pour emprunter (LB, I, p. 145.); le nombre des Emprunteurs (M, p.75)、④ les Emprunteurs (LB, I, p. 146.); Emprunteurs (M, p.75)、⑤ l' intérêt haut (LB, I, p. 146.); l' intérêt seroit gros (M, P.75)、⑥ la dissiperoient dans le même tems (LB, I, p. 146.); dissiperoit en aussi peu de tems ces mêmes revenus (M, p. 75)、⑦ emprunter (LB, I, p. 146.); les mêmes emprunts (M., p. 75)。④は、ともに「借手」であるから、フランス語訳はダンドロの

誤訳の素因にあげられない。

90 *Ibid.*, vol. I, p. 190/p. 191. 前掲邦訳、56ページ。イタリア語のテキストは *Così per necessaria conseguenza, dall'aumento del commercio, ne risulta un gran numero di prestatori, e un minor interesse.* である。

91 *Ibid.*, vol. I, p. 172/p. 173. 前掲邦訳、51ページ。フランス語訳は、*l'Intérêt des propriétaires de terre* (LB, I, p. 144); *l'intérêts des Terres* (M, p. 74.) である。

92 *Ibid.*, vol. I, pp. 188, 190, and 176/pp. 189, 191 e 177. 前掲邦訳、56, 53ページ。原文の *the monied interest* は、*l'intérêt de l'argent* (LB, I, pp. 159, 161.); *l'intérêt de l'Argent; l'argent* (M, pp. 82, 83.), *a great monied interest* は、*un grand intérêt d'argent* (LB, I, p. 148.); *un gros intérêt monnoyé* (M, 76.) である。

93 *Ibid.*, vol. I, p. 188/p. 189. 前掲邦訳、56ページ。

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 42*

発行所 東京都国立市中 2 - 1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1999年 3 月31 日

印刷所 岐阜市三輪プリントピア 3

株式会社コームラ
